筆のこなし理

全

二十

中村俊定文庫
文庫 18
717

松濤舎

遺民

山房

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

幡山協橋菴社某

宗像神社宝物館

方廣師のいとまなくみうしなふ都も
つゆ[illegible]
たとへ[illegible]
みよ[illegible]
たれつゝなく[illegible]
命をも幸切華乃永年

中村俊定文庫

さてわの父龍山の遺骨をうけ師と共に
百度参りのあつくわつらひ行つゝ
つもりよりきく見まつるとなく西行てう
雲うもた端坐して行たまひおもちの
やおなぎの人行はなるあり月山嶺のまつれ
なりしきこえる風談ことこまやかなりし
きんみ月たてして拝のたまれまりまれ

てゝ山まの松山にまれまるんとまきう
おきくさせもの霧のかりまるにおろく行ひ
おりうちおもしあるもしわ羽くせるの岡よ
鷹ね寒を雪うちる打出の濱より新せと
おもつう波乃日枝おろしにゆれおうえて塔う
れうをかきうよお病乃人うおりて簡
雲よそうきれうやう鐘つるにやうく家に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

上毛乃国より[illegible]

胸[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

○

[illegible]

白雲や逢ふにくゝ雪の原　上毛　亀童

たつみくゝあるの方まゝ行くゝ山

いさんくゝ拝ぶのくゝ

夢くゝ今いくゝ　芭蕉　西波

○

部屋くゝといふ立くゝ淋くゝたる霜月せまくゝ

ま文をくゝるるときこゝ幸くゝ今賢と

なりまくゝそくれお

百里来くゝ文や氷まくゝ墨の色　詰山

あくゝもれ命くゝ室の梅　兎毫

雪くゝ折くゝ雪れ竹　不可得

ちくゝ者のかくゝ花椿の落葉哉　柳桐

日ひくゝに翌くゝ杉の雪　白質

星きくゝ園御も氷の手向くゝる　旦格

冬枯や掘くゝゆくゝの葉卅　就風

塚くゝまくゝあれそのおくゝおん　朔字

埋火の白く淋しき庵さめうち　荻露
おとけれ軒端をうつる落葉哉　松叟
寒菊やありしに洞むきたの霜　古硯
埋火の消えさしに桐火桶　瓢圓
そのわれ腸よ冬ゝ新まれ　如雲
あるやなきうゝ一本雪折　女義南
そうゝ佛の深一のたゝく　三千国
雪のたゝかゝ雨の降ぬる　琴湖

あゝ野ゝ夢のうゝ枯にきり　芳菴
はくゝゝゝゝゝ淋しき海　河翠
おとけや雲の柳農羽毎月　柳別
消て後氣あゝ霜の壺所　桃李
あゝき一ぬ榊や雪明り　仙丈
本かたかゝ松を木哉　家副
霜ようゝゝ雪にかゝるも夢ときか　其水
老のおりれ寒菊ゝ涙うゝきり　思可

信濃

ぬれうく去る行き雲の船　法　不才

遅来之会

葉の花は近道しるきれる　上毛　夏鶯

鳴き初れし去れ去の春　麥雨

鶯に句ふ念仏寺　紅枝

震日や氣波の姿ちりき　東北

雨の梅ふりつめい散ふり　麥茂

七曲りたいしさん藤の花　蓬之

行鳴き去る雲雨　亀昌

陽炎に鴨鳴き法農海　丹山

鶯も柳の中に——の啼　春泉

り去や鳥去る西の空　少年　梅水

雪のこる小松の中や石仏　桑布

蝉ふや枝に青胡桃　東都　雅輔

なる波ふつり心の鴨の立　其堂

ちらくちらり初刈稲　菖三

かけ離く黄ちる泉の紅葉う那　雲萬

萩の妹ちるもちらくも庵にきり　信濃　故園

月の鵑かつ山の叫しまのまれら　苔二

鳳凰や刈きし夢の野アかな　水貫

白菊の霧に白しく枯にきり　真菅

背きくめくる童山る雨きし　橋人

まるるにちの之ゆりや秋の雨　畔古

おけや梅の木陰れ霜白き　義山

ちる人の笛れ導や　霜の月　東都　義節

桂をうの枯一力草　一水

京名れ消く甲斐し　霜柱　巴暁

消く行　霜ち平向の雫う生　三亀

夢の蟲きつ立寺枯野原　歌友

鬼の上れ　おく寒れ霜五敬　秀祇

鳴呼さ一六られ花津鐘の鉾　斗園

平行つれ　反　魂香の平向ち　桔園

日注月かさねてさらく霜つき
こゝ太充精舎に法莚をのべ霊牌を
まつり枠印の人々とともに落れ土升蓁
詞寂請まくり宥座善の供諸をもはて
出魂をるくさの侍る

義忠の今を為るく　塚の霜　露巣
朔の塵のうれ赤沼　瓦全

赤鳥寺のうちに焚捨て　蘭之
丈うち長拝をうる　春坡
併て長月を脚のくまも　春暁
陸奥賜まかてきれ　鷺洲
青冊のうち仮ろ地道　楓月
ちれ久月の色うひ　巣
多月の喜う命い打ろし　全

南なるけしの一かすかの宿　之
つきくし霍昜こく水みなく　坡
鹿鳴まのしれくひもて行　曉
白れの月ぬ関こうえ　洲
きく落久保地かる露　月
火の声く廣き板間つ北寒を　栄
宮に引きる　番匠ら槌　全

きりぎりす花ちるも見と送り　之
ちれ一萱こそきりて　坡
宇治川廉ろまぬ竹の窓　曉
紀の関守ろ　洲
ら蟬の通きを一かこ訪ま　月
親　寺門さらたの山や　栄
ぬまてちを時笠雨つちりや乳一　全

行き暮たる山かすみ　之洲

咲のこる花の養れまを訪て　城

孤をたゝる陣中の　曉

月の雲やあきの空　洲

野宮の影きさらぎ　月

法さきた手ぶくむ曽良の旅枕　巣

松を常盤の庵れる宅　全

今宵は何なに鉢たゝき　之洲

遣て翌をかろは嘯　洲

ふまれ水の所舎利のきれいまた　曉

流き池て星うつる新　月

駒の行まもなく花農夢　全

菫ちらしき友ちらしき　坡

一坐拾香

まれなわらべにきゆる月　蘭之

庭を掃く人を寒し松の葉　鷺洲

月よりはまされば霜の庭竈哉　春坡

光陰のうつり堀の苦寒し　楓月

なりけりをたのしよ清霜の月　玄曉

ちりてまた雪なりてその梅　瓦全

かりそめを主の水

別れ去年のことよりは霜夜哉　亀童

福寿草に紙書けや石菖花　正波

紙諧をうくおくたよりよりれ年寿を

ちれくれ月紙ちとおくよくくかくく

水蓼の岡の鴨ちとあれときけよ

友千鳥方廣法師もはるよりは裏の

霜し消竹のうちとれまれ

○

霜の花月の雪も法の道　諾山

ゆく春の月に袖農水の南　白質

てる雲寒梅の香　訃合哉　觚圓

白雪や雪を去年の名残れと　梅李

鮫汁の点りそめ　一めり　信中　卯元

ひらひらとそりてきやき千鳥哉　筒口

霜の花ふまれり駒よ小祥忌　宇呂

一ゆく舎利拾ふ寺のきれうな　周布

ゆくれ日れ次第にちらし雪車　東都　三巴

平白州ゆく冰きり　行脚　舟山

龍山遺唫

長閑や松のちるを

堀朝ゆ生姜かぎりの霄

春風や鮫ゆく店れ章車

入相の音や立ちまさる花の比
朱雀野や雲もれ出て雲めぐる
ゆく春や野も山鳥の尾の新樹
雲もかすみにこの山ぶかし
かすみや隠す三十日れ吉野山
袷着て藤さく庭を歩行
東都にて
羽織着て筑波を見ぬ日の暮れ

須磨にて

海暮て月ぞ雲間の須磨の雲
鶯や雲ぬけ出る諏訪の海
竹の子や雨ぬけ出る雲の
五月雨や鶴ぬけ出る瓜の夢
子規十分寝て羽農酒
うき草の中に湖水の田植哉
雲晴ゆれて雲ぬけ竹生島

きゝしかや月さゆる　古松葉

夜の月新宮まゝ水の流きり

萩原や月に小松　二三本

鹿啼や山ゝ井に暮のこり

月さゆる　秋も　月さゆる　さむさ

雪深き　長き　林　―　厚し　詳

待宵やかゝれ　花　嵐　ちり

きゝ　拾ひて

更科やかゝる山の月さゆる

若き寺ゝ

十六夜や貧女ゝ　灯籠寺

ちさはやかに咲寺の庭

踏きゝ　まゝに野菊のちり哉

いまゝに怖（オヂ）ゝ　おそる　かゝ　那

時の長し　里ちゝ　きゝ

初雪や豆腐屋の東山

流れてきれし柳や落水

枯野行人や入日長刀

朔方の山みな出て雪ふる

手枕して寒し金の蝿

寒蝶の髪のくもり今小春哉

鮫汁や妻の手ぶくろ加減

白妙の雪や淀用れ雲きれ

きれよ鉦吹くや寒念佛

ふるし出や鐘に出くる梅林義

○

書ふれし詩人の吟紙平向の

書義に出てふるし

鳴蛙ねぶるの鐘の雲に入　祐昌

かるふる柳花さく江のくり　此得

蓬莱の峰にくもるや月　五麦

今年春人を寂しがれよう　羅城
ま縄おろし拵えも月夜なれ　士朝
咲初る赤い月の萩の花　猿道
色木立さびしく神にたのまれ　重厚
困居身されし雲の術さえ　古鮮
くく人馬五月しいを五日の　升亡
卵かい蛍の日の月の雲の雲　此柱
色河や鶺鴒の尾をかきわけ　吾萍

男子に乞くく行豚の糞焚哉　可笛
白魚れをう曲アてのうさう　成義
天葉つ蓋や麦の浮世うねひく　木朶
火を蛍園に かれう花の雲　李山
空や海の二夕 藍みく石千鳥　蒲天
月ふく月に ふくく心う那　古青
数一葉 卵ふよ世ふく魚ての　桃二
月形ふう花 麦れるの餅めふ　斗外

山伏の行脚笠や小袁子　旭子
風流入骨とうけき干うつ　魚潭
鷹の詩やそれの艸紙そうろう　玉屑
芋に鷹ゆきき雪ちさくせ　月庵
花ちる日ゝよりゝ水をそそぎ　幸郷
初蚊や望月の暑き色　魯白
麻帷やうこん雲を皆白し　柳荘
乙鳥や大名荒き江戸ぜれ　大江丸

吹入て　杜風　入て縄暖簾　潢子
手をきゝ入たきこまれお扇　右汐
やまゝ鳥庭ゝ松蔭ゝ　岱雨
行ゝや小家めくる反古買　素蘭
羽頭の雲やの行てゆきの雨　文里
父母れこ到一巨燒の右左り　露香
世話茶よの花にまれよ人心　枕流
手落ゝ雲に肥ゝたゝの花　雨銘

風吹て蕎麦や水鶏のあたつく　蕉風
梅ぬまく羽の雨とはつきの　布言
花ゆゑとあり寺に花のちる哉　馬素
行春や古寺ふる洋芍扇　猶綱
十六夜や夕顔棚の残り花　信芳
次の宿く草葉の露や寒会佛　雅石
ちりしきの色吹来や　秋の風　梅發
木かくしや海ゑも男とあるとかく　正範

格式のちく寺行るや松の内　梅雨
うち枯や行内通し農道古き　蘿道
菊合を茅屋に茅屋れて品かち　如洋
暦こそ京人之言の初さく　一古
其夜より雨ぬかりの捨園　槐主
夜ぬきや月入られぬを寝過　去何
掃てうれしきもあり庵の煤　五明

志のみちをこのあるじあり高なるあり正あるべきを
為ちかつとるべきに法華のそしりをうくらんを出説
さきを設もちゐるべきをもあり世を
たもあらず道くの一をもとして靈ばちをもとる
ありとの事を聞ばつくるべきをもとしてむう
事のごとくに思ひそしるべきあるべき事を
凡特の為をもとにして人のをもとしてをの

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

寛政十二申霜月

みくりや

蕉門書林　皇都寺町通二條　橘屋治兵衛梓